

拝啓 東工大テニス部 現役諸兄、諸姉殿

いつも現役の活躍ぶりを E-mail で知らせていただき中々の御成績、慶賀に存じます。日本におれば時々は応援に行きたいところ遠隔地ゆえ失礼しています。蔵前メールは楽しみの一つですが受け取るばかりでは申しわけないと思っていたところ、滞在中のオーストラリアでデヴィスカップのオーストラリア対英国戦を観戦しましたので今までのご無沙汰のお詫びかたがたご報告いたします。

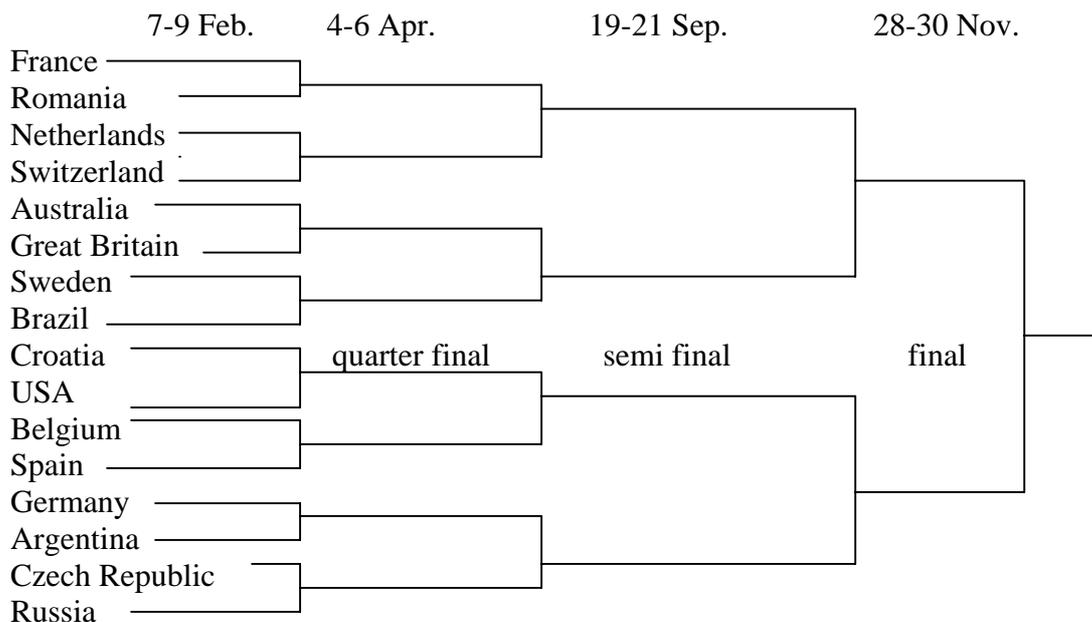
さて、デ杯は小生が工大でテニスをやっていた昭和30年代では日本人プレイヤーが外国人と試合をするまれな機会でした。

当時日本の代表は加茂、宮城、後に慶応の石黒も加わっていました。相手はフィリピンのアンボン、ディロそれにインドのクリシュナンなどが今でも目に浮かびます。田園コロシウムで試合を観た後工大に帰って試合をすると力が抜けて何となく上手くなったように感じたものでした。

オーストラリアは今もそうだけど当時はもっときわだった存在でローズウォール、レーバー、ホードなど頭抜けた選手を輩出していました。

1974年に南アがタイトルを取るまで、1900年にボストンで開始されて以来70余年間デ杯のタイトルはアメリカ、イギリス、フランスおよびオーストラリアの四カ国だけで占められており特に第二次大戦後のほぼ30年間はアメリカとオーストラリアの二ヶ国で独占していました。1974年以降はスエーデン、イタリー、チェコスロバキア、ドイツ、スペイン、ロシアなどが顔を出してくるしフランスも復活して多彩になっています。

1971年までは Challenge Round と称していますから勝ち上がった国がデ杯保持国に挑戦していた様ですが今は World Group Final と称して16ヶ国集まりトーナメントをやっています。2003年の出場国は次の通りです。このうち半数くらいにはシードのマークが付いていますので残りの半数が各地域の予選で決まって来るのかと思いますが。詳細はわかりません。



それぞれの試合は世界各国で同じ日に行われているようで、オーストラリアの次の相手がスウェーデン(1997, 98 Champion)であることは最終日にはきまっていました。

この中には日本はもちろん馴染みの有るアジアの国名はありません。四大会でのアジア人の低調ぶりからして当然のこととは思いますが寂しいですね。ところがインドだけは別で優勝こそしていませんが Final には時々顔を出しています。

今回手に入れたパンフレットによればかつて日本が有力なテニス国であったことがわかります。1921年日本は当時のデ杯保持国アメリカへの挑戦権を争うトーナメント final でオーストラリアを4 - 1で破りました。アメリカとの Challenge round はニューヨークで行われ残念ながら5 - 0で敗れていますが、有名な清水善造 チルデンの試合はこのときだったと記憶しています。

さて小生の見物したのはこの World Group final の一回戦オーストラリア対英国でシドニーのオリンピックパークの中にあるクレイ(アンツーカー)の立派なコートでした。オーストラリアは世界ランキング No.1 のヒューイトを擁する強豪、対する英国にはかつての面影はなく勝負ははっきりしていました。因みに現在の国別ランキングは

- 1 フランス(2001, 1996 Champion)
- 2 ロシア(2002 Champion)
- 3 オーストラリア(1999 Champion)
- 4 スペイン(2000 Champion)
- 5 USA(1995 Champion)

と発表されており、インドが16位、英国は17位となっていました。

一日目第一試合

Mark Philippoussis(豪)対 Alan Mackin(英)

オーストラリアのこのギリシャ人みたいな名前の選手は26歳、かつて囑望されていたのですが左ひざの故障で低迷、3年ぶりのデ杯出場でした。この日は193cm、91kgから繰り出す豪快なショットでイギリスの Mackin(21歳)を圧倒 6-3 6-3 6-3 でした。

第二試合

Lleyton Hewitt(豪)対 Alex Bogdanovic(英)

お目当てのヒューイトはさすがに安定しており、オールラウンドプレイヤーと見受けました。レシーブが特にすばらしく21歳とは思えないエラーの少ないテニスでした。全豪オープンでは早々に姿を消す事が多くオーストラリア人をがっかりさせていますが、今後も楽しみな選手です。対する Bogdanovic は Croatia 生まれの18歳(全米 Semi-finalist)、もう少しでセットを取るところまでいきましたが最後はかわされました。成長すれば Henman 以来のイギリスを背負って立つ選手になる可能性を秘めています。7 - 5
6 - 1 6 - 2

二日目 ダブルス

Lleyton Hewitt(豪) Miles Maclagan(英)

Todd Woodbridge(豪)対 Arvind Parmar(英)

Hewitt はダブルスも上手で、パートナーの Woodbridge が 31 歳、経験豊かで実績もあるダブルスプレイヤーでもあり、1 セット取られたものの対抗戦はこの試合でまさりました。

三日目第一試合（消化試合に付き 3 セットマッチ）

Wayne Arthurs（豪）対 Miles Maclagan（英）

Arthurs 選手は古い選手だが中々人気がありユーモアたっぷりのゲームでわかせていました。

第二試合

Todd Woodbridge（豪）対 Alex Bogdanovic（英）

消化試合ながら好ゲームで最後は Bogdanovic 選手が制しイギリスに一勝をもたらした。

気付き事項を幾つか書いておきましょう。

1 アンツーカーでボールの跡がはっきり残るせいか、ちょっとあやしい時や選手からクレームがつくと主審が下まで降りて確かめていました。中々親切な対応でした。判定がひっくり返ってアウトがセーフになった場合そのポイントはやり直すことは少ないのに驚きました。エースが多いせいもありませんがあやしい球は返しておくのが原則なのでしょう。

2 Arthurs 選手だけが完全なサーブ アンド ボレーで他のシングルスは後ろでの打ち合いとドロップショットの組み合わせでした。しかし連中にもドロップショットは難しいようで確率はあまり高くない。

3 黒いテニスシューズがはやっているのか、ダブルスでは 4 人中 3 人が黒。そのうちの一人は靴下まで黒でしたが何か薄汚れた感じがして良いものではありません。旧日本陸軍工兵隊がテニスをしているような印象です。

4 サポーター達の応援合戦がさかんです。双方四、五十名ずつのはでなユニフォームを着た集団がトランペットを持ち出して色々な替え歌を歌います。観客が爆笑する事も多くユーモアたっぷりのようです。オーストラリア側は“クリケットでもやっつけたしテニスもかなわない”と葬送曲風に奏でれば、イギリスは英国国歌の替え歌で最後の God save the Queen! を God save your Queen! と替えて歌います。これは英国女王をいまだ君主に戴く立憲君主国のオーストラリア人にはこたえるようです。

5 観客はお年寄り夫婦が多く全体としては静かでしたが中には派手な服装のピチピチギャルの私設応援団も活躍していました。

6 ポイントの数え方は世界共通ですがゲームの数え方は色々あります。日本ではサービス側を先に 1 - 3 と呼ぶ事が多いようですが、あれは世界的に認められたものではないと思います。今回注意して聞いてみるとゲーム終了直後に“Australia leads 3 games to one”等と言っていました。

7 少し値の張る席だったのですが朝は先ずレストランでシャンパン、試合の合間の昼食はワインをしっかりと飲んでほろ酔い加減で観戦と酒好きにはこたえられないベストコンディションでした。

以上 35 年卒 後藤